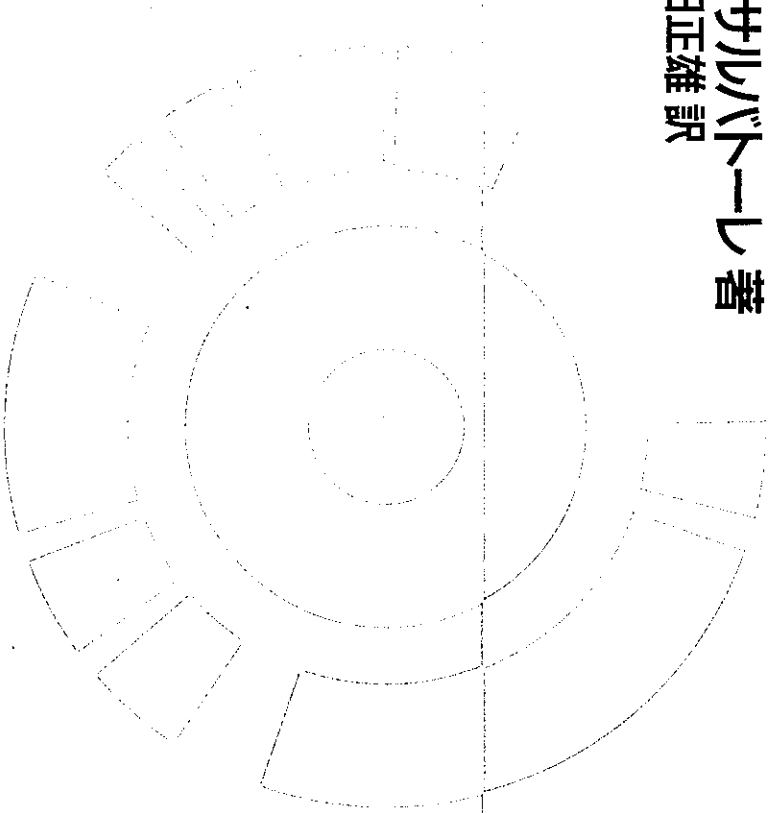


# 入門

新編の教科書

# 国際経済学

D.サルバトーレ 著  
小田正雄 訳



シーエーピー出版

10-1	各国の経済目標	272
10-2	支出変更政策下の対内均衡	272
10-3	支出転換政策下の対外均衡	273
10-4	支出変更政策と支出転換政策下の対内均衡と対外均衡	274
10-5	財政・金融政策による対内均衡と対外均衡	275
10-6	対内均衡と対外均衡のためのポリシー・ミックス	277
10-7	直接統制	279
	演習問題	279
	キーワード	309
<b>第11章 国際収支のワネタリ・アゾローチと変動為替レート制対</b>		
	固定為替レート制	310
11-1	固定為替レート制下のワネタリ・アゾローチ	310
11-2	固定為替レート制下のワネタリ・アゾローチの政策的意味	311
11-3	変動為替レート制下のワネタリ・アゾローチ	311
11-4	為替レート制度のタイプ	312
11-5	変動為替レート制賛成論	313
11-6	固定為替レート制賛成論	314
	演習問題	314
	キーワード	328
<b>第12章 国際通貨制度：過去と現在</b>		
12-1	古典的な金本位制の時期	329
12-2	両大戦間の時期	329
12-3	ブレトンウッズ体制	330
12-4	ブレトンウッズ体制の活動と発展	331
12-5	アメリカの国際収支問題	333
12-6	ブレトンウッズ体制の崩壊	333
12-7	現在の国際通貨制度	334
	演習問題	336
	キーワード	353
	索引	355

# 第1章 序論

## 1.1 国際経済学と経済理論

国際経済学は各国間の経済関係を扱う。その結果生ずる相互依存関係は世界の多くの国の経済厚生にとって非常に重要であり、しかもその依存関係はより高まってきている(例1)。

各国間の経済関係は一国内の各部門間の経済関係と異なる(例2)。これは異なった問題を生じさせ、若干異なった分析手法を必要とする。したがって国際経済学を、異なった別の「応用」経済学としてとりあげる必要がある。

**例1** 世界の多くの国は、ある財、サービス、および生産要素を輸出し、それと交換に自国では相対的に劣った効率でしか供給できないか、または全く供給できないもの(たとえば、アメリカにおけるコーヒー、ドイツにおける石油、ケニアにおける乗用車)を輸入する。したがって、多くの国の経済厚生のかなりの部分は、国際的相互依存に決定的に依っている。この相互依存はこの20年間にいつそう高まっており、それは世界貿易が世界生産よりもより急速に伸びてきたという事実によって知ることができる。

**例2** アメリカの企業がある機械をドイツに輸出しようとするときは、ドイツが課している(関税のような)貿易制限に直面するであろう。また、言語、

習慣、法律などの違いを克服しなければならない。さらに、アメリカ企業はドルとの関係でその価値が変わる外国通貨で支払いを受けるかもしれない。そのような障壁はアメリカ企業が国内で機械を販売するときには存在しない。一国内の地域間の関係に対して国際間の関係から生ずる別の問題を分析するためには、純粋に国内問題を扱うミクロ経済学とマクロ経済学の分析手法を修正、改善、拡張、統合しなければならない。

## 1.2 国際経済学の研究テーマ

国際経済学は次のようなテーマを扱う。

- (1) 国際貿易の純粋理論 貿易の基礎と貿易利益を明らかにする。
- (2) 通商政策の理論 自由貿易が望ましい理由と自由貿易への介入の効果 を明らかにする。
- (3) 国際収支 世界の他の国との総支払と総受取を検討する。
- (4) 国際収支の調整 さまざまな国際通貨制度のもとでの国際収支不均衡の調整のメカニズムを扱う。

このうち、(1)と(2)は国際経済学のミクロ経済学の側面であり、本書の前半で扱う。(3)と(4)はマクロ経済学の側面であり、本書の後半で扱う。

## 1.3 重商主義的な考え方

(16世紀から18世紀の半ばまでイギリス、スペイン、フランス、およびオランダで一般的にみられた) 重商主義として知られた経済思想は、一国が裕福になり強くなるための最も重要な方法は、その国が輸入する以上に輸出することであると主張した。この輸出入の差は貴金属、主として金の流入によって決済される。一国の金が増えれば増えるほど、その国はより裕福になり、強力な国になった。したがって重商主義は、政府は輸出を促進し、輸入を抑制すべきであると主張する。すべての国が同時に輸出超過になることはできず、また金の存在量はある時点では一定であるので、一国が利益を得るのもつばら他国の犠牲においてである(問題1.6)。

## 1.4 アダム・スミス：絶対優位

1776年にアダム・スミスは著名な著書、『諸国民の富』を出版したが、そこ

で重商主義者の貿易についての考え方を批判し、自由貿易こそが世界の各国にとって最善の政策であると主張した。スミスは、自由貿易のもとで、各国は絶対優位を持つ財(ないし他国よりもより効率的に生産できる財)の生産に特化し、絶対劣位にある(ないし効率性の劣る)財を輸入することができる。主張した。生産における国際的特化は、世界の生産を拡大し、その利益は貿易当事国に配分されることになる。したがって、一国が他国の犠牲において利益を得る必要はないのであり、すべての国が同時に利益を得ることができる。

例3 表1.1は、小麦の生産ではアメリカがイギリスに絶対優位にあり、布の生産ではイギリスが絶対優位にあることを示している。もしアメリカが小麦の生産に特化し、イギリスが布の生産に特化すれば、アメリカとイギリス全体の小麦と布の生産はより多くなり、アメリカもイギリスも共に(自発的)な交換を通じてこの増加した生産の利益にあずかることができる(問題1.7と1.8)。

表 1.1

	アメリカ	イギリス
小麦(アッシュェル/労働時間)	6	1
布(ヤード/労働時間)	1	2

スミスの絶対優位の理論は正しいのであるが、しかしその守備範囲は限られている。それは国際貿易のごくわずかの部分を説明しているにすぎない。40年後に比較優位の理論で世界貿易の大部分を説明したリカードまで待たなければならなかった。

## 1.5 テビット・リカード：比較優位

リカードは、仮に一国が他国と比べて両財の生産において絶対劣位にあっても、相互に利益のある貿易が起こりうることを明らかにした。効率性が相対的に劣る国は、その絶対的な比較劣位がより少ない財の生産と輸出に特化

すべきである。これはその国が比較優位を持つ財である。他方、その国はその絶対的比較劣位がより大きい財を輸入すべきである。これはその国が比較劣位にある分野である。以上は比較優位の原理として知られており、経済学の最も有名でまだ挑戦にされたことのない法則である。

例 4 表1.2は、イギリスはアメリカに比べて、小麦と布の両財の生産において絶対的に比較劣位にあることを示している。しかしその劣位の程度は小麦よりも布のほうがより低い。したがって、イギリスはアメリカと比べて布に比較優位を持ち、小麦が比較劣位にある。アメリカはその逆である。つまり、アメリカは両財においてイギリスに対して比較優位にあるが、しかしその優位性は、小麦（6：1）は、布（3：2）よりも大きい。したがってアメリカはイギリスと比べて小麦に比較優位を持ち、布に比較劣位にある。アメリカから小麦（W）が輸出され、イギリスから布（C）が輸出されるという形で相互に利益のある貿易が行われるであろう。

例 5 表1.2から、もしアメリカがイギリスと6Wを6Cと交換すれば、アメリカは3Cの利益を得る（なぜなら国内では6Wは3Cと交換できるにすぎないからである）。6Wを生産するには、イギリスでは6労働時間が必要である。その代わり、イギリスでは6労働時間で12Cを生産でき、12Cのうち6Cをアメリカからの6Wと交換するので、6Cだけ手元に残る。したがって、6Wと6Cを交換することによって、アメリカは3Cの利益を得、イギリスは6Cの利益を得る。両国にとって利益になるWとCの交換比率は、（6Wと6C以外にも）たくさんある [問題1.13(c)]。実際に交換が行われる比率は、貿易利益が両国にどのように配分されるかを決める。その交換比率は、各国の需要条件にも依存する。この点は第3章で議論する。

表 1.2

	アメリカ	イギリス
小麦(アッシェル/労働時間)	6	1
布(ヤード/労働時間)	3	2

## 1.6 リカードの比較優位論の評価

リカードはいくつかの単純化の仮定のもとに理論を展開した(問題1.18)。そのなかの1つは、いわゆる労働価値説であり、それは財の価値ないし価格はその財の生産に用いられた労働量に等しいか、またはそれによって決められるとする。今日では、労働価値説は否定されている(問題1.21)。したがってまた、比較優位についてのリカードの説明も否定しなければならないが、比較優位それ自身は否定される必要はない。比較優位の原理は正しいのであり、機会費用を用いて説明することができる。これは第2章でなされる。

### 演習問題

#### 国際経済学の研究者への

1.1 (a) 国際経済学は何を扱うか。(b) なぜそれを学ぶのか。(c) 国際経済学を経済学の1つの特別の分野として正当化できるのはなぜか。

[解] (a) 国際経済学は各国間の経済関係や相互依存性を扱う。これらは各国間の政治的、社会的、文化的、軍事的関係に影響を与える（またそれらによって影響を受ける）。

(b) われわれが国際経済学を学ぶのは、主として財、サービス、および生産要素の国際移動が自国の消費者の経済厚生にどのような影響を与えるかを分析するためである。(注意すべきことは、消費が経済活動の目的であり、生産と交換はそのための手段にすぎないということである。) われわれはまたこれらの国際的な移動を規制しようとする一国の政策が自国の経済厚生にどのような影響を与えるかを明らかにしたり、それを予測したりする。個人として、また投票者として、これらの問題について明確な意見を持つことができるように国際経済学を学ぶ必要がある。

(c) 国際経済学を1つの研究分野と考えることができるのは、国際経済関係は一国内の地域間の経済関係と異なり、国内経済を分析する手法とは若干違った分析手法を必要とするからである。国際経済学はこの200年にわたって特別の研究分野であったし、その発展は、スミス、ミル、ヤーンセン、サミュエルソンその他世界の著名な経済学者の貢献によっている。

1.2 (a) 国際経済関係は一国内の地域経済関係とどのように異なるか、(b) どのような点が似ているか、両者は他の経済学とどう違うのか。

【解】 (a) 各国は財、サービスおよび生産要素の自由な国際移動を制限する。言語、習慣、および法律の違いは、これらの国際的な移動を妨げる。さらに、国際的な移動は異なった通貨による受取と支払を伴い、その通貨の価値は他の通貨と比べて時間と共に変わるかもしれない。これは一国内の地域間における財、サービス、および生産要素の移動と比較されるべきである。そこでは関税のような障壁はなく、同一通貨で取引され、また通常同じ言語で、基本的には同じ慣習や法律のもとで行われる。

(b) 国際経済関係も地域経済関係も、空間ないし距離を克服しなければならぬ。実際、両者は距離が作り出す問題から生まれる。この点は経済学その他の分野とは異なっており、ここでは空間を捨象し、生産、交換、および消費が空間における1点で行われるとみなしている。

1.3 (a) 一国の世界の他の国に対する経済的依存性の度合は、どのように測ることができるか、(b) アメリカが他の非共産先進国と比べて貿易に依存する程度が低いのはなぜか、(c) もしアメリカが国際貿易を完全に行わなくなれば、その生活水準はどうなるか。

【解】 (a) 一国が世界の他の国にどの程度、経済的に依存しているかを表す1つの基準は、GNPに対する輸入の比率である。ベルギー、オランダ、スイス、デンマーク、およびスウェーデンのような小さな先進国では、それは30%から60%のあいだにある。ドイツ、イギリス、フランス、およびイタリアのような大きな先進国では、それは20%から30%の水準である。アメリカの場合、ほぼ9%である。

(b) アメリカは豊富な天然資源と人的資源を持つ大陸サイズの国である。したがって、アメリカは自分が必要とする財の多くを比較的効率的に生産することができる。これと対照的なのがスイスのような小国であり、そこでは少数の財の生産と輸出に特化し、他財を輸入する。一般的に、そして(a)の数字が示すように、国の規模が大きくなればなるほど、世界の他の国に依存する度合いは小さくなる。

(c) アメリカが外国貿易に依存する度合が相対的に低いとしても、その高い生

活水準のかなりの部分は貿易に依存している。1つには、コーヒー、紅茶、ココア、スコッチ、コンヤック等のような財は、アメリカでは全く生産できない。さらに、錫、タンクステンのような鉱物はアメリカにはないが、それらは工業品の生産に不可欠である。経済的な厚生水準にとって量的により重要な財は、アメリカでも生産することはできるが、輸入財よりも相対的により高いコストがかかる財である。これらは貿易利益のかなりの部分を説明する。しかしながら、アメリカは世界貿易から撤退しても決定的な打撃を受けずに生き続けることができるであろう。しかしロシアを除く他の先進国については、このことはあてはまらない(ロシアは大国であるのに加えて、最近まで政治的、軍事的理由から、自給自足政策を積極的に行ってきた)。

1.4 (a) 理論の目的は何か、(b) 国際経済学者が行う単純化の仮定のいくつかを述べなさい、(c) 彼らが明らかにしようとするものは何か。

【解】 (a) 理論の目的——それは経済理論だけでなく理論一般についていえるのであるが——は、予測し説明することである。つまり、理論は複雑な現実のなかから未節部分をとり除き、物事を予測し説明するのに最も重要と思われる若干の重要な関係に焦点を当てるのである。

(b) 国際経済学者は通常2国、2財、2要素の世界を仮定する。さらに、完全競争、生産要素は国内的には完全に移動するが、国際的には全く移動しない、財やサービスの自由な国際移動に対する障壁は初期には存在しない、輸送費はゼロ、などを仮定する。さらに付加的な仮定をしばしば設ける。このような仮定は一見不当に制限的であるようにみえる。しかしそのような単純化されたモデルのもとで得られた結論の多くは、多数国、多数財、および多数生産要素の世界に拡張することができる。また、完全競争が一般的でない場合、生産要素の国内移動は完全な形では行われないが国際的な生産要素の移動が若干存在する場合、各国が貿易制限を行う場合、そして輸送費がゼロでない場合、というようさまざまな状況に拡張できる。

(c) このような単純化の仮定のもとに、国際経済学者は(1) 財やサービスの国際的な移動の構成や大きさを予測し説明する、(2) それらが自国の経済厚生に与える影響を評価する、(3) 各国の政策がこのような移動にいか

る影響を与え、それを通じて自国の経済厚生にどのような影響を与えるかを予測しようとする。

1.5 (a) 国際貿易の純粋理論と通商政策の理論は、なぜ国際経済学のミクロ的側面といわれるのか。(b) 国際収支と国際収支不均衡の調整の問題が、国際経済学のマクロ的側面といわれるのはなぜか。

【解】 (a) 貿易の純粋理論は貿易の基礎と貿易利益を扱う。通商政策理論は、自由貿易が望ましい理由と自由貿易への介入の効果明らかにする。これらのトピックスは各国を1つの経済主体として、また個々の(相対的な)財、要素、および価格を扱う形で議論されるので、ミクロ経済分野の領域に入る。

(b) 現実の世界では、各国は他国と多くの財、サービス、および生産要素を取引する。国際収支はこれらの国際取引のすべてから生ずる総受取と総支払をまとめたものであり、したがって、マクロ経済的概念となる。さらに、貿易と貿易から生ずる国際収支不均衡に対する必要な調整は、貿易当事国の生産、全体としての所得水準、および一般物価水準に影響を与える。これらはマクロ経済的概念である。本書は抽象的、理論的水準から出発し、その後、応用ないし政策的な性質を持つ側面に進む形をとっている。問題を解決するための適切な政策を提案するためには、まず問題を理解しなければならぬからである。本書の後半部分では、ミクロ経済的な分析手法とマクロ経済的な分析手法の統合が必要とされるであろう。

### リカード以前の貿易理論

1.6 (a) 一国の富についての重商主義者の考え方は、今日の考え方とどう違うか。(b) なぜ重商主義者は金の蓄えを主張したか。(c) 貿易についての重商主義者の見解は、アダム・スミスの見解とどう違うか。

【解】 (a) 重商主義者によれば、一国の富は保有する貴金属、とりわけ金の保有量によって測られた。今日では一国の富は、その国が生産に用いる人的、物的資源の総ストックによって測られる。一国の富が大きければ大きいほど、その国民が利用可能な財やサービスのフローが大きくなり、その国の生活水準が高まる。

(b) 重商主義者が金の蓄積を主張したのは、金を国の本當の富であると考えていたからである。よりこみ入ったレベルの分析としては、より合理的な理由が存在する。金があれば、その国の君主は軍隊をつくることができ、海軍を維持し、それによってその国の力を強化して植民地をつくることができる。金を増やすことは流通している金貨を増やすことを意味し、経済活動がより活発になる。金を貯えるためには、輸出を促進して輸入を抑制する必要があるが、それによって一国の生産と雇用を拡大することができる。(c) 重商主義者は貿易への政府の厳しい統制を主張し、各国の目的は基本的に対立するものであることを明らかにしようとし、さらに経済ナショナリズムを説いた。若干洗練され、また変形された形ではあるが、このような考え方のいくつかは現在でもみられており、新重商主義の1つとして生き続けている。他方、アダム・スミス(およびその他の古典派経済学者)は、自由貿易こそが世界の各国にとって最適政策であると主張した。この自由貿易政策のなかでは、ごくわずかな例外だけが認められてきた。その1つは国防にとって重要な産業の保護である。

1.7 (a) 表1.3を参照して、アメリカとイギリスが絶対優位にある財を示しなさい。(b) もし6Wと3Cが交換されるとすれば、アメリカとイギリスはどれだけ利益を得るか。(c) もし6Wと6Cが交換されればどうか。

表 1.3

	アメリカ	イギリス
小麦(アッシェル/労働時間)	6	1
布(ヤード/労働時間)	1	3

【解】 (a) アメリカは小麦の生産でイギリスに比べてより効率的であり、また絶対優位にあるのに対して、イギリスは布の生産でアメリカに比べて絶対優位を持つ。

(b) もしアメリカがイギリスと6Wを3Cと交換することができれば、アメリカは2Cの利益を得ることができ、または2労働時間を節約できる。なぜな

ら、アメリカは国内的には6Wと1Cが交換できるにすぎないからである。イギリスがアメリカから得る6Wは、イギリスで生産すれば6労働時間に相当し、またそれだけの時間を必要としたであろう。同じ6労働時間でイギリスでは18Cの生産が可能である。3C(それは1労働時間を必要とするにすぎない)を6Wと交換することによって、イギリスは15Cの利益を得ることができ、または5労働時間を節約できる。

(c) もしアメリカがイギリスと6Wを6Cと交換できれば、アメリカは5Cの利益を得ることができ、または5労働時間を節約できる。イギリスでは6Wは18Cと同等であり、イギリスでは6Wのために6Cを犠牲にすればよいので、イギリスは12Cの利益を得ることができ、または4労働時間を節約することができる。

**1.8** (a) アダム・スミスはどのようにして、すべての貿易当事国が貿易から利益を得ることができることを説明したか。(b) 各国はなぜ自由な貿易に制限を課すのか。

**[解]** (a) スミスは、もし各国がより効率的に生産できる財に特化し(または自国が消費する以上を生産し)、この超過部分をその国で生産効率が劣る財と交換すれば、貿易に登場するすべての財の生産は増加することを示した。この増加は、貿易しようとするすべての国に帰属する。したがって、貿易利益は生産の特化と貿易によって生ずる。これはスミスが「国内で生ずることを示した特化の利益ないし分業(と交換)の利益を、国際的な側面に拡張したものに他ならない。このような利益は、自国経済の活動への政府介入が少なからずないほど(リッセ=フェール, 自由放任), また国際貿易への介入が少なからずないほど(自由貿易), 大きくなるであろう。

(b) スミスは自由貿易が一般的に世界の厚生を最大化すると信じていたので、各国が財、サービス、および生産要素の自由な移動に制限を課していることは1つの矛盾のように思えた。貿易制限は一国の厚生という立場から正当化されることがある。事実、通常それは輸入によって損害を受ける産業によって主張され、そのような産業を保護するために用いられる。かくして、貿易制限は(自国内で生産される財により高い価格を支払われる)多数の人々の犠牲において、少数の人々に利益を与えるものである。

### 比較優位

**1.9** 表1.4から、(a) アメリカは小麦と布の生産で絶対優位にあるのか、あるいは絶対劣位にあるのか、(b) アメリカとイギリスが比較優位にあるのはどの財か、(c) もしアメリカとイギリスが6Wと6Cを交換すれば、それぞれの利益はいくらか。

表 1.4

小麦(アツシエル/労働時間)	アメリカ	イギリス
	6	1
布(ヤード/労働時間)	4	3

**[解]** (a) アメリカは両財の生産でイギリスに対して絶対優位を持つ。このような状況のもとでの貿易は絶対優位によるのではない。

(b) アメリカがイギリスに対して持つ絶対優位は、布においてよりも(4:3)小麦においてより大きい(6:1)。したがって、アメリカはイギリスと比べて小麦において比較優位にあり、布において比較劣位にある。注意すべきことは、アメリカが小麦の生産に比較優位を持つば、(定義によって)布についてはアメリカは比較劣位にあり、イギリスが比較優位を持つということである。これは2国2財の場合には必ずいえるのである。

(c) もしアメリカがイギリスと6Wを6Cと交換すれば、アメリカは2Cの利益を得るか、 $\frac{1}{2}$ 労働時間の節約ができる。というのは、アメリカは国内的には6Wと4Cを交換できるにすぎないからである。イギリスが自分で6Wを生産するには6労働時間が必要であった。その代わりイギリスはこの6労働時間を使って18Cの生産を行う。この18Cのなかの6Cをアメリカとの6Wの交換に用いれば、イギリスは12Cの利益ないし4労働時間を節約することができる。

**1.10** (a) もし弁護士が1時間100ドル稼ぐが、同時に1時間に10ドル受け取

る秘書よりも2倍早くタイプを打つことができる。その秘書を解雇して自らタイプを打つことは弁護士にとって有利か。(b) (a)の答えに用いた考え方は、どのような原理の応用か。

【解】 (a) もし弁護士が法律の仕事に(働きたい全労働時間について)専念できるのであれば、自分でタイプを打つことは割に合わないであろう。彼女がタイプする各時間について、20ドル節約できるであろう。なぜなら、10ドル受け取る秘書の2倍の速さでタイプすることができるからである。しかしながら、1時間タイプするためには、弁護士の仕事を1時間犠牲にしなければならず、したがって100ドルを犠牲にしなければならない。その場合、弁護士はタイプの仕事をするによって、各時間当たり80ドルを失うことになる。

(b) これは比較優位の原理の日常生活への1つの応用である。弁護士は秘書よりもタイプ(2倍の)でも弁護士の仕事でも、絶対優位を持っている。しかしながら、その絶対優位性はタイプよりも弁護士の仕事ではるかに(無限に)大きい。なぜなら秘書は弁護士の仕事はできないからである。したがって、弁護士は弁護士の仕事に特化し(つまり、それに全時間を使い)、タイプは秘書にまかせるほうが有利である。秘書もまた別の仕事を探して収入を減らすようなことをしなくてもよいので利益を得る。(もしその弁護士の仕事が少なくなり失業するようになれば、自分でタイプを打つことによって1時間につき10ドルを節約ないし稼ぐことができるであろう。)

1.11 表1.5から、アメリカはイギリスに比べてどの財に絶対優位と絶対優位を持つか。またアメリカはどの財を輸出するか。

表 1.5

	(a)		(b)		(c)	
	アメリカ	イギリス	アメリカ	イギリス	アメリカ	イギリス
小麦(ブッシェル/労働時間)	4	2	4	1	4	2
布(ヤード/労働時間)	3	2	1	1	2	1

【解】 (a) アメリカは両財ともイギリスに比べて絶対優位を持つ。しかし比較優位は小麦(4:2)の方が布(3:2)よりも高いので、アメリカはイギリスに比べて小麦に比較優位を持ち布に比較劣位を持つ。したがって、アメリカは小麦の生産に特化し、イギリスの布と交換に小麦を輸出すべきである。

(b) アメリカは小麦に絶対優位を持つが、布での生産性はイギリスと同じである。したがってアメリカは小麦に比較優位を持ち、イギリスの布と交換にイギリスに小麦を輸出すべきである。

(c) アメリカは両財の生産でイギリスに絶対優位を持つ。しかしこの比較優位は小麦(4:2)と布(2:1)と同じである。つまり、アメリカは小麦と布の両財の生産でちょうど2倍効率的である。この場合は、比較優位ないし比較劣位ということはできず、互いに利益となる貿易は生じない。たとえば、アメリカが貿易から利益を得るためには、4Wに対して2C以上を得なければならぬ(なぜなら、アメリカは国内的に4Wと2Cが交換できるからである)。しかしイギリスはアメリカからの4Wに対して2C以上を支払う意思はない。なぜなら、イギリスは2Cを犠牲にすれば、4Wを自国内で生産できるからである。したがって、比較優位の原理は次のように若干修正して読むのがよい。つまり、仮に一国が他国と比べて両財の生産に絶対劣位を持つについても、その絶対劣位がちょうど等しいとか、また2財で同一比率であるということであれば、互いに利益のある貿易は依然として可能である。

1.12 表1.6(例4の表1.2と同じ)を参照して、もし(a) 6Wが9Cと交換されれば、(b) 6Wが3Cと交換されれば、(c) 6Wが12Cと交換されれば、どうなるかを考えなさい。

表 1.6

	アメリカ	イギリス
小麦(ブッシェル/労働時間)	6	1
布(ヤード/労働時間)	3	2



【解】 (a) もしアメリカがイギリスと6Wを9Cと交換すれば、アメリカは6Cの利益を得るか、または2労働時間を節約できる。イギリスでは6Wは12Cに等しい(または、それを生産するだけの労働時間を必要とする)。イギリスは6Wのために9Cを犠牲にするにすぎないので、3Cの利益を得るか、または1/6の労働時間を節約できる。例5ではWは1:1の比率でCと交換されたが、ここでは交換比率は1:1/6である。いずれの場合でも、両国は貿易から利益を得る(ただし、その利益の大きさは異なる。例5を見よ。)

(b) もしアメリカがイギリスと6Wと3Cを交換すれば、アメリカは何の利益も得ない(というのはアメリカでは6Wと3Cはそれを生産するのに1労働時間を必要とするからである)。したがって、貿易からの利益(9C)は、すべてイギリスに帰属する。この場合、アメリカにとっては無差別で、貿易しないであろう。

(c) もしアメリカがイギリスと6Wを12Cと交換すれば、アメリカは貿易からの利益のすべて(9C)を得る。したがってイギリスは何の利益(と損失)も得ない(というのは、イギリスでは6Wと12Cを生産するのに共に6労働時間を必要とするからである)。この場合イギリスにとっては無差別で、貿易しないであろう。

1.13 表1.6から、(a) アメリカはイギリスと6Wを3Cより低い交換比率で交換するであろうか、なぜか。(b) イギリスは6Wを12Cより高い交換比率で交換するであろうか、なぜか。(c) アメリカとイギリスが互いに利益を得る貿易は、6Wに対してCのどれだけの量がその限界になるか。

【解】 (a) アメリカでは1労働時間は6Wか3Cのいずれかを生産できる。したがって、アメリカは6Wを3Cより低い布とは交換しないであろう。(b) イギリスは6W(イギリスでつくれば6労働時間を必要とするにすぎない)を12C以上の布(それは6労働時間以上を必要とする)と交換することはしないであろう。

(c) アメリカとイギリスが共に貿易から利益を得るためには、6Wは3C以上(アメリカが利益を得るために)、しかし12C以下(イギリスが利益を得るために)と交換されなければならない。つまり $3C < 6W < 12C$ である。12Cと3Cの差(つまり9C)は、生産の特化と貿易からの総利益を表す。交換

比率が6W対12Cに近づけば近づくほど、貿易利益のより多くがアメリカに帰属する。他方、交換比率が6W対3Cに近づけば近づくほど、貿易利益のより多くがイギリスに帰属する。(この範囲のなかで)実際の交換比率がどの水準に決まるかは、各国の需要条件に依存する。これは第3章で検討される。この問題(そして本章)では、貿易利益はすべて布で表されていることに注意されたい。貿易利益をすべて小麦で表すこともでき、また一部は小麦で一部は布で表すこともできる(第2章を見よ)。最後に、もし一定の交換比率で6W以上が貿易されれば、両国全体の貿易利益および各国の貿易利益はそれに比例して大きくなるであろう。この点も第2章で示される。

1.14 スミスやリカードが仮定したように、労働が唯一の生産要素であり、また同質(つまりすべてが1つのタイプである)であるとしよう。その時、(a) 表1.6で示されているように、アメリカとイギリスで小麦と布を生産するコストを労働含有量で表しなさい。(b) 貿易前のアメリカとイギリスについて、布のコストないし価格( $P_c$ )に対する小麦のコストないし価格( $P_w$ )を労働含有量で表しなさい。(c) アメリカとイギリスについて貿易前の $P_w$ に対する $P_c$ を表しなさい。

【解】 (a) 表1.6から、アメリカでは1労働時間で6Wを生産することがわかる。したがって、1Wは1/6労働時間で生産される。これは表1.7の左上の枠に記されている。他の数字も同様に表1.6から得られる。

表 1.7

	アメリカ	イギリス
1W生産するための労働時間でのコスト	1/6	1
1C生産するための労働時間でのコスト	1/3	1/2

(b) 貿易前に、アメリカでは1Cの生産に必要な労働時間の半分で1Wが生産される(1/6は1/3の1/2である)。このことは、アメリカでは1W生産するコストないし価格 $P_w$ (ドルではなく労働含有量で表された)は、1C生産するコストないし価格 $P_c$ (同様に労働含有量で表された)の1/2で

あることを意味する。つまり、貿易前にアメリカでは $P_w = P_c/2$ 、または $P_w/P_c = 1/2$ である。このことは、 $P_c$ に対する $P_w$ の値は $1/2$ であるということ、これがわれわれの求めているものである。イギリスについては、貿易前では1Wの生産に1Cの2倍の労働時間を必要としている(表1.7)。したがって、貿易前にイギリスでは $P_w = 2P_c$ 、または $P_w/P_c = 2$ である。相互に利益になる貿易の基礎となるのは、貿易前におけるアメリカとイギリスのあいだでのこのような相対価格の違いである。

(c)  $P_w$ に対する $P_c$ は $P_c/P_w$ として書くことができる。 $P_c/P_w$ は $P_w/P_c$ の逆数である。アメリカの貿易前の $P_w/P_c = 1/2$ である [ (b)を見よ ] から、アメリカでの $P_c/P_w$ は2である。イギリスについては、貿易前に $P_w/P_c = 2$ であることを (b) で知っている。したがってイギリスでは $P_c/P_w = 1/2$ である。したがって、イギリスはアメリカに比べて布に生産費、ないし価格で比較優位を持っており、逆にアメリカは小麦において比較優位を持っている。

**1.15** 問題1.14について、(a) 互いに利益が生ずる貿易の限界を $P_w/P_c$ と $P_c/P_w$ によって表しなさい。(b) もし $P_c/P_w$ が貿易によって1に固定されるとすれば、アメリカとイギリスにとって貿易利益はどのように示すことができるか。

**【解】** (a) 問題1.14(b)で、貿易前アメリカでは $P_w/P_c = 1/2$ で、イギリスでは $P_w/P_c = 2$ であった。したがって相互に利益を得る限界は

$$1/2 < P_w/P_c < 2$$

である。問題1.14(c)で、貿易前アメリカでは $P_c/P_w = 2$ でイギリスでは $P_c/P_w = 1/2$ であった。したがって相互に利益を得る限界は

$$1/2 < P_c/P_w < 2$$

である。以上から、アメリカはイギリスと比べて小麦に生産費ないし価格で比較優位にあり、イギリスは布に比較優位を持つことがわかる。

(b) もし $P_c/P_w = 1$ で貿易すれば、アメリカは自国で供給するよりもより低い相対価格でイギリスから布を輸入することができることから利益を得る [ なぜなら、貿易前にはアメリカでは $P_c/P_w = 2$ であるからである。問題1.14(c)を見よ ]。いいかえれば、このことはアメリカはもし自国内で生産すれば1Cのために2Wを犠牲にしなければならないのに、貿易では1Wの

犠牲で1Cを得ることができることを意味する。貿易では $P_c/P_w = 1$ 、 $P_w/P_c = 1$ である。イギリスでは貿易前は $P_w/P_c = 2$ である [ 問題1.14(b) ]。したがって、イギリスが1Cを自国で生産すれば2の相対価格を支払わなければならない(つまり、自国では1Wに対して2Cを犠牲にしなければならない)のに、1の相対価格で小麦が輸入できるので、イギリスも貿易から利益を得る。

**1.16** 表1.8(表1.5と同じ)から、(a) アメリカとイギリスの小麦と布の生産コストを労働含有量で表しなさい。(b) 貿易前のアメリカとイギリスについて $P_c/P_w$ を求めなさい。(c) 相互に利益を得る限界を $P_c/P_w$ で表してなさい。その結論は何を意味するか。

表 1.8

	アメリカ	イギリス
小麦(アッシュェル/労働時間)	4	2
布(ヤード/労働時間)	2	1

**【解】** (a) 表1.9

表 1.9

	アメリカ	イギリス
1W生産のための労働時間でのコスト	1/4	1/2
1C生産のための労働時間でのコスト	1/2	1

(b) アメリカの場合、貿易前は

$$\frac{P_c}{P_w} = \frac{1/2}{1/4} = 2$$

イギリスの場合、貿易前は

$$\frac{P_c}{P_w} = \frac{1}{1/2} = 2$$

(c)  $2 < P_C/P_W < 2$ . これは布の小麦に対する相対価格は貿易前にはアメリカとイギリスで同じであることを意味する。したがって、生産費ないし価格の比較優位は全くなく、相互に利益のある貿易は不可能である。

1.17 表1.6を参照し、アメリカで1労働時間当たりの賃金率を\$6、イギリスでのそれを\$1.8としよう(£はイギリスの通貨でポンドを表す)。(a) 貿易前においてアメリカにおける $P_W$ と $P_C$ をドルで、またイギリスにおけるそれをポンドで表しなさい。(b) もしドルとポンドの為替レートが1ポンド=3ドル(つまり£1=\$3)であれば、アメリカはどの財を輸入し輸出するか。(c) £1=\$0.50であればどうか。(d) £1=\$2、£1=\$1ではどうか。(e) アメリカとイギリスの貿易はいつバランスするか。

【解】(a) アメリカでは1労働時間は6ドルで6W生産するので、 $P_W=1$ ドルとなる。同様にアメリカでは $P_C=2$ ドルとなる。イギリスでは $P_W=1.8$ ポンド、 $P_C=0.9$ ポンドである。

(b) もし£1=\$3であれば、貿易前のイギリスでは $P_W=1.8$ ポンド=5.40ドル、 $P_C=0.9$ ポンド=2.7ドルである。 $P_W$ と $P_C$ は(ドルで)イギリスよりもアメリカで共に安いので、アメリカは両財をイギリスに輸出するのである。もしこれらの財しか貿易されないのであれば、貿易はアメリカに有利な形で不均衡になる。つまりポンドの為替レートが非常に高く、イギリスの比較優位が生じない。

(c) もし£1=\$0.5であれば、貿易前のイギリスでは $P_W=£1.8=$0.9$ 、 $P_C=£0.9=$0.45$ となる。その場合アメリカは両財を輸入し、貿易はイギリスに有利な形で不均衡になる。つまりポンドの為替レートはあまりにも低く、小麦におけるアメリカの比較優位が生じない。

(d) もし£1=\$2であれば、貿易前のイギリスでは $P_W=£1.8=$3.60$ 、 $P_C=£0.90=$1.80$ となる。いまや $P_W$ は(ドルで)イギリスよりもアメリカで安く、 $P_C$ は(ドルで)アメリカでより高い、相対的な財価格の違いは、アメリカとイギリスでの絶対価格の違いとなって現れる。したがって、アメリカはイギリスに小麦を輸出し、布を輸入する。もし£1=\$1であれば、貿易前のイギリスで $P_W=$1.80$ 、 $P_C=$0.9$ となる。したがって、アメリカはイギリスに小麦を輸出し布を輸入する。これが進行するにつれて

$P_W$ はアメリカで上昇しイギリスで低下し、最終的には $P_W$ は(同一通貨で表して)両国で一致する。その逆のことが布について生じ、 $P_C$ は両国で同一になる。輸送費がなければ、 $P_W$ と $P_C$ が(同一通貨で)2国で一致するとき、貿易の拡大が停止する。

(e) もしドルとポンドのあいだの為替レートが自由に変動し、小麦と布が生産され貿易される唯一の財であれば、為替レートはアメリカのイギリスへの小麦の輸出額が、アメリカのイギリスからの布の輸入額と等しくなるように決まる。このとき、アメリカとイギリスのあいだの貿易は均衡する。もし為替レートが国際的な約束で固定されれば、貿易が均衡するまで、各国の賃金率が変化し(貿易赤字の国で上昇し、貿易赤字国で低下)しなければならぬ。

1.18 リカーードの比較優位の原理が想定する陽表的、暗黙的な仮定を述べよ。

【解】(1) 2国2財

- (2) 自由貿易
- (3) 一国内における労働の完全な移動性と国際間での不移動性
- (4) 生産費一定
- (5) 輸送費なし
- (6) 技術進歩なし
- (7) 労働価値説

仮定(1)は簡単にゆるめられる(問題1.19, 1.20)。仮定(7)は否定されなければならぬ(問題1.21)。国際貿易の近代理論の主な目的は、比較優位の原理をより一般的な理論によって説明し、リカーードが想定した仮定の多くをゆるめて貿易の基礎と貿易利益を説明することである。これは次の2章でなされる。

1.19 もし貿易前に、アメリカで $P_W/P_C=1/2$ 、イギリスで2であれば、アメリカは小麦に比較優位を持ち、それをイギリスに輸出し、逆にイギリスは布に比較優位を持ち、それをアメリカに輸出する。いま第3国ドイツを加え、ドイツでは貿易前に $P_W/P_C=1$ とする。これら3国間の多角的貿易がどのように行われるかを説明しなさい。

【解】 貿易前にアメリカにおける $P_w/P_c$ はイギリスとドイツのそれよりも低いので、アメリカは小麦の生産に比較優位を持ち、それを輸出すべきである。貿易前におけるイギリスの $P_w/P_c$ はアメリカとドイツのそれよりも高い(したがって $P_c/P_w$ は低い)ので、イギリスは布に比較優位を持ち、それを輸出すべきである。3国すべてに利益を与えることのできる貿易の限界は、 $1/2 < P_w/P_c < 2$ である。もし貿易下の $P_w/P_c$ が、 $1/2$ より大きく1より小さい範囲に入れば、アメリカはイギリスとドイツの両国に小麦を輸出し、両国から布を輸入すべきである。この貿易パターンは3国すべてに利益をもたらす。他方、もし貿易下の $P_w/P_c$ が1より大きく2より小さければ、アメリカもドイツも共にイギリスに小麦を輸出し、両国共イギリスから布を輸入すべきである。仮に貿易下の $P_w/P_c$ が1に決まれば、その場合にはアメリカはイギリスに小麦を輸出し、イギリスはアメリカに布を輸出すべきである。貿易下のアメリカとイギリスの $P_w/P_c$ は貿易前のドイツにおける $P_w/P_c$ に等しいので、その場合ドイツは貿易を行わない。3国以上の小麦と布の貿易パターンも同様な方法で決めることができる。

1.20 表1.10を参照して、次の場合についてアメリカが輸出する財と輸入する財を示しなさい。(a)  $\$1 = \$1$  (b)  $\$1 = \$2$  (c)  $\$1 = \$0.50$

表 1.10

財	アメリカドルでの価格	イギリスポンドでの価格
A	1	9
B	4	7
C	6	6
D	8	4
E	12	1

【解】 (a) この問題(そして他の問題)に答えるためには、まずすべての財の価格を同一通貨で表し、その上で2国の価格を比べなければならない。たとえば $\$1 = \$1$ のときのイギリス財のドル価格は

財	A	B	C	D	E
イギリスにおけるドル価格	9	7	6	4	1

この場合、アメリカはAとBとイギリスに輸出し、DとEを輸入する。(b) もし $\$1 = \$2$ であれば、イギリス財のドル価格は

財	A	B	C	D	E
イギリスにおけるドル価格	18	14	12	8	2

この場合、アメリカはA, B, およびCをイギリスに輸出し、Eを輸入する。

(c) もし $\$1 = \$0.50$ であれば

財	A	B	C	D	E
イギリスにおけるドル価格	4.50	3.50	3	2	0.50

いまやアメリカはAだけをイギリスに輸出し、他のすべてを輸入する。このような分析はより多くの財と2国以上の国を含む場合にも拡張できる。

1.21 (a) 労働価値説は何を述べようとしているか。(b) おれわれはなぜそれを否定しなければならないか。

【解】 (a) 労働価値説は、ある財の価値ないし価格は、その財の生産に用いられる労働時間の大きさに等しいか、またはそれから推察できると主張する。これは、(1)労働が唯一の生産要素であるか、その労働がすべての財の生産に同じ一定比率で用いられること、(2)労働が同質的であること(つまり、1つのタイプしかないこと)を意味する。このような仮定に立って、問題1.14で貿易前のアメリカでは、小麦1単位生産するのに1労働時間の1/6が必要とされ、布1単位生産するのに1労働時間の1/3が必要とされるので、アメリカでは $P_w = P_c/2$ となるのである。

(b) 労働価値説が否定されなければならないのは、次の理由による。(1) 労働が唯一の生産要素でもないし、それがすべての財の生産で同じ一定比率で用いられるわけではない(鉄のような財は繊維のような他の財と比べて、資本1単位当たりの労働量は少ない。さらに、生産では通常資本に対する労働の代替が可能である)。(2) 労働は明らかに決して1つのタイプではない(医者のような労働はより多くの技術を体化してより生産的であり、他の労働よりもはるかに高い賃金を受け取る)。このような理由で、労働価値説は否定されなければならない。近代理論はこのような欠陥を克服しており、比較優位の説明に用いることができる。これは機会費用の理論と生産

アメリカの労働一人当たり生産  
イギリスの労働一人当たり生産

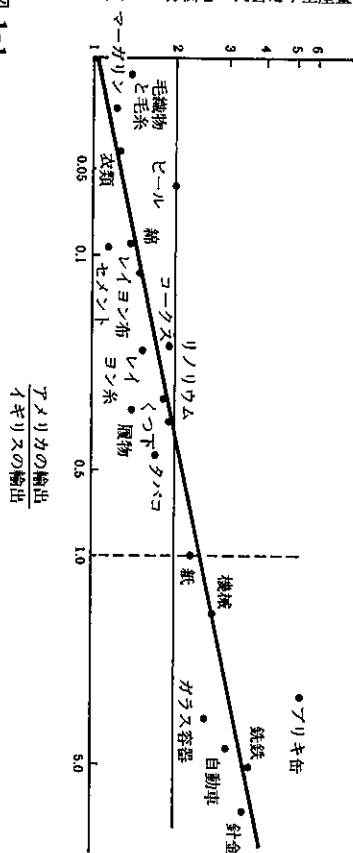


図 1-1

可能曲線を用いて、第2章でなされる。

**1.22** 図 1-1 はリカードの貿易モデルの実証研究の結果を示している。対数目盛がとってある(したがって、同一距離は同一百分比変化を表す)。縦軸はアメリカの労働の生産性のイギリスのそれに対する比率を測っている。横軸は20産業における世界の他の国に対するアメリカの輸出のイギリスのそれに対する比率を表す。この図はリカードの貿易理論を支持するか、それともそれを否定するか。

**【解】** この図は、リカード貿易モデルを支持している。つまり、イギリスの労働生産性に対するアメリカの労働生産性が高いほど、イギリス輸出に対するアメリカ輸出比率も大きい。したがって、労働コスト以外の生産コスト、需要条件その他は、相対的な労働生産性と輸出シェアとの関係をこわしていない。

## キーワード

貿易の純粋理論 貿易の基礎や貿易利益を扱う理論

貿易の基礎 国際貿易を生じさせる諸力(スミスの場合には絶対優位、リカードの場合には比較優位)

貿易利益 生産と貿易の特化より得られる各国の消費の増加

通商政策の理論 自由な貿易の流れへの介入が行われる理由、およびその効果を扱

## う理論

**国際収支** 一国の世界の他の国からの総受取と総支払を表す。

**国際収支の調整** 国際収支不均衡を是正するメカニズム

**ミクロ経済学** ある特定の国や、ある特定の財の相対価格に関連する個々の経済単位を扱う。

**マクロ経済学** 一国の世界の他の国からの総受取や総支払、一般物価水準など一国経済全体ないし集計値を扱う。

**絶対優位** ある財の生産において一国が他国に対して持つ絶対的な優位

**比較優位の原理** 貿易を決めるこの原理は、仮に一国がある財の生産において他国よりも絶対的に劣位にあっても、また効率が劣っていても、効率性の劣る国は絶対的な劣位の最も小さい(比較優位な)財の生産に特化して、その財の一部を輸出して他の財と交換すれば、互いに貿易から利益を得ることができるとを述べている。

**労働価値説** ある財の価値ないし価格は、その財の生産に投入された労働時間の大きさに等しい、またはそれによって決定されるという理論